

特定課題研究「自分の意見の形成と他人の意見の推測の実験研究」研究成果報告書

平成 30 年 4 月 19 日受付

小 田 秀 典*

要 旨

再分配に関する実験研究を行なった。どのような再分配を人々が望ましいと思うかは、従来の研究が示す通り、初期分配がどのように決定されるかに依存するが、本研究は、初期分配がまったく偶然に実現された場合でも人々はそれを考慮して再分配の提案をした。これは、社会秩序や既得権に関して人々が現状維持の傾向を持つことを示唆する。

キーワード：実験経済学，再分配，現状維持バイアス，既得権，公平

現実社会における再分配の重要性に鑑み、様々な再分配実験が行われている。標準的な再分配実験は、まず互いに匿名の 2 人の被験者の初期所得を何らかの方法で決定し、続いて兩人にその再分配についての意見を求め、いずれかの提案が採用される。ただし初期分配は、(a) 被験者の能力あるいは努力（計算問題やパズルの正解数）に応じて、あるいは (b) 被験者の危険受容度と（安全な低所得と危険な高所得をいずれを選ぶか）偶然によって決定されるのが一般的である。すると完全に利己的な再分配（自分が全所得を独占する）を提案できる場合でも、少なくとも被験者たちは、完全な平等分配や他者にも一定割合を与える再分配を提案する。

実験結果は、ノンパラメトリックに他者への分配率が設定ごとに比較されることもあるが、Fehr & Schmidt (QJE 1999) は、各被験者は自分の所得 x_i と他者の所得 x_j に依存する効用関数 $U_i(x_i, x_j)$ をもつと想定し、実験結果に基づいてパラメータを推定した。この方法は多くの実験研究に受け継がれ、多くの再分配実験がなされた (Cappelen *et al.* AER 2007, *etc.*)。しかし、実験室実験の結果は不明確で、推定される効用関数の説明力は弱い (Binmore & Shaked (JEBO 2010) の Fehr-Schmidt 型効用関数に対する批判は、他の効用関数にも当てはまる)。最近、その理由を実験環境の非現実性や報酬の低額さに求めて、大規模な野外実験が推進されているが、結果は明瞭ではない (Dröschner & Musshoff *Ecological Economics*, 2015, *etc.*)。

しかし、再分配理論の説明力の弱さは、実験室環境の非現実性ではなく、理論の想定非現実性に起因するかもしれない。じっさい、(A) 認知的不協和 (Festinger 1957) を知る心理学者は、「人間は、

* 京都産業大学経済学部

得られた結果を所与の評価基準に従って評価するのではなく、結果に応じて評価基準を変更する」ことを指摘し、(B) 副作用効果 (Knobe 2003 *Philosophical Psychology*) を考察する哲学者は、「人間は、利害の評価だけではなく、他者の行動の背後にある意図に対する賞賛あるいは非難を考慮する」と主張するだろう。所与の $U_i(x_i, x_j)$ を前提にする分析は、どちらの現象も適切に考慮できない。

このような状況において、Servtk & Cox (*Experimental Economics*, 2013) は、再分配者の選択肢を制御して「被験者はまったく同じ x_i と x_j をもたらす他者の提案も、『他者は x_j の最大化だけを目的としている』と解釈されうる設定では拒否し、『他者は x_i も配慮して意思決定している』と推測されうる設定では受容する」ことを示した。「自分の意見の形成と他人の意見の推測の実験研究」は、この実験研究を発展させて (B) について新たな知見を得ることから構想されたが、昨年度はその準備として特定課題によって、(A) の観点からの実験を実施した（実験は、小田の指導する本学大学院経済学研究科の繆蓄との共同研究として実施された）。

当初の作業仮説は、「被験者は、複数の普遍性のある公平基準のなかから、自分の利益に最もあうものを結果に応じて選択する。すなわち、初期分配で自分が有利なときにはその維持を正当化し、そうでないときには平等を求める」であった。これは、多くの既存研究 (Cappelen *et al.* *AER* 2007, Utikal & Fischbacher, *Economics and Philosophy* 2014, *etc.*) の前提「各人は個性として多様な公平観を持ち、その公平観と初期分配の（結果ではなく）決定され方に応じて、自身が公平と信じる再分配を提案する」と対立する仮説である。

昨年度の実験では、「自分が不利な分配に対しては平等な再分配を求めるが、自分有利な分配に対しては再分配を求めない」ことは確かめられなかったが、「初期分配が自分に不利であった被験者の再提案提案」と「初期分配が自分に有利であった被験者の再提案提案」の間には有意な差が確認された。これは、(a) と (b) の設定では既存研究の仮説から予想されることであるが、(c) 初期分配がまったく偶然によって決められるときにも観察された。つまり、初期分配が被験者の能力や意思決定に依存しないことが明らかなきときでも、多くの被験者たちは（初期分配が自分に有利であれ不利であれ）初期分配を考慮して再分配案を提案した。このことは、理由の如何によらず一度実現された分配に対して人々が正当性を認めることを示唆し、社会における不平等や既得権益に対する人々の態度を理解するために重要な知見を与える可能性がある。

特定課題研究による以上の準備のおかげで、今年度は研究計画が科研費に採択された（2018-20年度基盤研究 (C) 「再分配の実験研究：意図の推測と評価の更新」）。昨年度の (A) の実験研究を完成させるとともに、昨年度に教育研究設備整備計画で導入されたアイトラッカーを利用して (B) の観点からの実験研究を始め、(A) と (B) の両面から再分配実験の研究を進展させたい。

評価の更新と他者の意図の推測に基づく公平概念の変更は、現実社会において重要であるにもかかわらず、経済理論でも経済実験でも十分な注意を払われてこなかった。他者の意図の推測と結果に基づく公平概念の変更についての知見を実験研究によって深め、その経済理論および再分配政策についての含意を明らかにしたい。

以上の研究は昨年度に開始されたもので、現時点（2018年4月）では学会報告も出版もされていない。昨年度の研究業績：“Denite descriptions and the alleged eastwest variation in judgments about reference”, Yu Izumi, Masashi Kasaki, Yan Zhou, Sobei H. Oda, *Philosophical Studies* (2018) 175: 1183-1205。

An experimental study of one's opinion on income redistribution and guess at others' opinions on it

Hidenori ODA

Abstract

A series of laboratory experiments was done. Existing researches show what people consider a fair redistribution depends on how the initial distribution was determined. In addition to this, our subjects took the current distribution into account even if it was an outcome of chance. This results suggests that people has a status quo bias toward the present social order about social order and when they judge social order and vested rights.

Keywords : experimental economics, income redistribution, status quo bias, vested rights, fairness